

# 東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2021

## 「ほがらかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第4回 11/10 (水) 13:30～15:00 報告

山田耕筰、童謡・唱歌の世界「歌は朗らかな光」

講師 内田恵美子 (本学講師)

於：図書館大セミナー室

\*◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*

令和3年度第4回公開講座(受講者40名)が11月10日に開催されました。今年度の共通テーマ「ほがらかに生きる」の中で、内田恵美子先生は「山田耕筰、童謡・唱歌の世界：歌は朗らかな光」の演題で講演されました。

山田耕筰は、童謡「赤とんぼ」で知られる作曲家ですが、オペラなど1600曲以上も作曲されています。更に指揮者としてオーケストラを各地で作り、その育成にも尽力されています。また、ワーグナーを日本で初めて紹介した人物であり、多数の著書を残しています。まさに、日本の音楽芸術の基礎を築いた偉大な作曲家でありました。

内田先生は、山田耕筰が音楽とともに生きた生涯について、代表曲を鑑賞しながら解説されています。また、曲の演奏において歌を内田恵美子先生、ピアノを野村知子先生と橋本亜紀先生、そして湯浅卓雄氏の指揮によるアルスター交響楽団が加わり、非常に有意義な講義でした。

講義内容としては、山田耕筰の生涯を1886年の出生から1965年の逝去までを5つの時代に分類して解説されています。

最初は、山田耕筰の出生から音楽を志すまでの内容でした。

キリスト教の家庭で、7人兄弟の6番目に生まれた耕作は、それほど裕福ではなかったが、家にはバイオリンとオルガンがあり英語で賛美歌を歌うという、恵まれた環境で育っています。そのため、幼少期から英語が堪能であり、この事が後々功を奏してくるようです。その後、横須賀に移りますが、そこでは常に音楽が聞こえている生活であり、7歳頃から既に音楽家になる決意をしているようです。また、築地の外国人居留にいた頃のエピソードですが、それまではバイオリンとオルガンの音を聞いて育った耕作ですが、異人館から聞こえるピアノの音を初めて聞き衝撃を受け、音楽の虜になっていきます。

一番上の姉は日本人として初めてイギリス人(エドワード・ガントレット)と結婚して戸籍に入った人です。ここでのエピソードとして、耕作はエドワードさんの譜めくりをしていたようです。譜めくりは楽譜が読めないとできない仕事であり、耕作は楽譜に対する独自のノートを作成して譜めくりを行っています。これにより、耕作の高い音楽能力が認められ、エドワード夫妻と同居する事となります。

その後、東京音楽学校(現在の東京芸術大学)に入学しますが、本来は作曲科に入りたかったようですが、その頃は作曲科が無かったため声楽科に入学しました。

しかし、作曲家を志す耕作は声楽科で作曲を行います。但し、自分の名前公表できない

ため外国人の適当な名前を付けて演奏していましたが、誰も耕筈の曲だとは気づきませんでした。唯一、マイスター教授だけは耕筈の作曲と気づき、才能を認めることになります。更に、マイスター教授は音楽愛好家であった男爵（岩崎小弥太）にベルリン留学の資金援助をお願いしています。そして1910年、無事にドイツのベルリン王立芸術アカデミーに合格して、留学する事となります。この時の受験生は47名、合格者はたった3名でした。世界各国から西洋音楽を学んだ受験生が集まり受験していますが、日本では作曲を勉強する方法やレコードも無い時代であり、その中で合格していることは如何に耕筈が音楽の才能に満ちていたかが伺われます。念願の音楽の勉強を思う存分行う事になりますが、同時にドイツ語の勉強も必死に行っています。

その後、1910年に三木露風の詩集から日本人初の芸術歌曲「嘆き」を作曲します。これは失恋のショックから作曲したとされています。

曲を鑑賞しましたが日本の曲ではなく、まるでシューベルトを聞いている感覚です。

そして1912年、日本人初の交響曲「かちどきと平和」を作曲します。その中でも評価の高い第3楽章を鑑賞しました。留学後2年、26歳で作った曲ですが、この曲もベートーベンやブラームスが作った曲に感じられます。またこの曲の楽譜が戦争で焼けてしまったため、日本では長い間演奏できませんでしたが、2年前に楽譜を集める事ができ演奏されています。そして1913年、日本人初のオペラ「墮ちたる天女」が誕生します。これは、山田耕筈が作曲、坪内逍遙の台本で作られました。このオペラは1914年にドイツでの初演が決まり、衣装や舞台の打ち合わせのため日本に帰国した耕筈でしたが、第1次世界大戦が勃発したためドイツに帰れなくなり、日本で活動する事となります。

日本では岩崎小弥太の資金援助もあり、東京フィルハーモニー協会でも毎月耕筈の曲の演奏会が開催されています。この時耕筈は「日本の未開拓の音楽原野を切り開くのは自分しかない」と言っています。そのために何をすべきか。①全国にまたがる演奏会網を作る。②同志を糾合して演奏会を全行的に展開する。③職業団体の組織と定期演奏会を開く。しかも20年後に実現できるとしています。自分が捨て石となり2代、3代先の事を考えていました。

また耕筈は、「日本語のアクセントと旋律が融合していない事に不安と失望を感じた」とも語っています。そこで1916年、三木露風の「唄」を作曲しています。この曲は音楽が詩に入っているのではなく、詩と一つになって流れているとしています。

その後1917年「野薔薇」が作曲されます。この曲によって、詩と音楽の融合が完成に近づき、1925年の「からたちの花」によって完成する事となります。

1915年頃はドイツが戦渦であり、ロシアも革命が起こったため活動できない音楽家たちはアメリカに集結していました。耕筈も1918年渡米しカーネギーホールで演奏する事となりましたが、公演は大変な反響を受け、アメリカ政府から全米での演奏と講演を委託されます。そしてニューヨーク近代音楽協会会員にも推薦されています。つまり、海外が日本より先に山田耕筈を認めました。

日本においても洋楽に対する人気が高まってきます。ヨーロッパの著名な音楽家が来日し

てピアノリサイタルなどが開かれるようになります。また、1918年、童謡「赤い鳥」が創刊され、婦人雑誌にも楽譜が載るようになり、一般の方にも音楽が浸透していきます。耕筈も世界の著名な作曲家の曲を紹介、演奏しつつ自分の作品も精力的に発表していきます。そして、耕筈が36歳のとき北原白秋と出会い、1926年の「からたちの花」によって曲と詩の融合が完成されます。

この歌詞を朗読すると、いつの間にかメロディーを口ずさんでいるように抑揚がそのまま詩になっています。

1922年には、北原白秋の「AIYANの歌」において、連作歌曲の頂点に立ちます。

耕筈は「日本語のアクセントは高低アクセント、抑揚であるためアクセントのある音節を、その前の音より高い音に置けばよい」という方法を考え出します。これにより日本語のアクセントと旋律の融合は完成されていきます。

そして、関東大震災、第2次世界大戦、終戦と激動の時代となりますが、耕筈は精力的に活動していきます。レコード会社の専属となり、ロシアやイタリアからの招待も受けています。

その後1947年、オペラ「香妃」を完成させるが、闘病生活がはじまり作曲や著作は減少していきます。その中でも耕筈は多くの勲章を授与され、広く認められていきます。しかし昭和40年病気が悪化し79歳で逝去されます。

耕筈には、苦しい生活の中でも心が癒された瞬間がありました。湘南に帰り子供たちが遊んでいる姿を見ることにより、童心に帰り心が癒されます。その中で作った曲が「赤とんぼ」でした。

最後の曲「赤とんぼ」では受講者の多くが曲を口ずさんでおり、最後まで受講者を魅了する有意義な講義であったと感じました。

#### 【講座の様子】



